

食事場面での母親の行動認識と、感情対処方略としての食行動が、摂食障害傾向に及ぼす影響

田中志帆

〔キーワード〕 摂食障害傾向、感情への対処的摂食、ネガティブ感情、母子相互作用

〈要 約〉

本研究では、女子青年の18歳以前の食事場面における母子相互作用の認識と、ネガティブ感情に対処するための食行動（Emotional Eating Scale）が摂食障害傾向に及ぼす影響について検討した。母子相互作用が、抑うつ感情、怒りや欲求不満、恐怖や動揺の感情に対処するために行う食行動に影響を及ぼし、過食や、やせ願望を生じさせ、青年の身体内部感覚の混乱（内部洞察の混乱）に至るというモデルを仮定した。また、食事場面での母親の実際の存在、体重満足度と摂食障害傾向との関連も検討した。女子大学生329名（平均年齢19.75歳）について分析を行った結果、母親が食事時に「常に側にいなかった」群は、他の群よりも、EESの怒り・欲求不満対処食行動尺度得点が有意に高かった。体重不満足感が高い青年は、EESの抑うつ感、EDIのやせ願望、過食、内部洞察の混乱の得点が高かった。モデルの検討においては、母子相互作用の「支配強制」から「怒り・欲求不満対処食行動」を媒介とするモデル、「要求察知」「支配強制」から「恐怖・動揺対処食行動食」を媒介とするモデルの適合がよいことが示された。

問題と目的

摂食障害は思春期・青年期の女性に多く見られるが、男子大学生を対象とした調査では摂食障害のリスクありと判断された割合は、0.8%であったという（早野，2002）。発症率の男女差が縮まっていることを考えると、痩身が男女を問わず美的基準になっているからかもしれない。一般にやせたいという思いからダイエットを試みる青年は多い。しかしながら、ダイエットを行う誰もが摂食障害に陥るわけではない。青年期では、健常な女性が、現実以上に自分の体型を「太っている」「スタイルはよくない」とみなす傾向があり、女子大生の友達同士が軽く「私太っちゃってー」と、互いに言いあうことはよくある。身体知覚の差は、臨床群と健常者群の間に有意な差はないとする報告もある（Whitehouse & Freeman & Annandale, 1988）。痩身願望や身体イメージの障害は、発症してからの一側面にすぎず、原因ではないという見解も存在している（生田，1995；Rosen & Tacy & Howell, 1990）。もちろん、痩身願望も摂食障害を誘発させる重要な要素ではあるだろう（馬場・菅原，2000；浦上・小島・沢宮・坂野，2009）。

だが、大概青年期の女性は、ダイエットを始めても持続しない。目標体重に達したところでやめるか、あるいは途中で挫折して三日坊主的に終わる。しかし、一部の女性がダイエット開

始後、摂食障害に陥るのは、拒食がその人にとってダイエットで得られる以上の別の利益をもたらすからではないか。また過食が常習化するのも、単に摂食制限のリバウンドではなく、詰め込み、食べることで何らかの利益（疾病利得）を得ているからであろう（田中，2000，2003）。

では、摂食障害の要因となるものには、瘦身願望以外にこれまで何が議論されているのだろうか。Bruch（1978/岡部・溝口，1979）は、摂食障害の治療上の経験から、食事場面での子どもの要求と養育者の供給のサインがかみあわないことで、子どもが自分自身の内的な欲求に気づくことが困難になり、思春期になって自立を成し遂げるために食行動を拒否すると述べている。幼児期における摂食障害、いわゆるインファンタイル・アノレキシアの研究は、このような母子相互作用に焦点が当てられている（Chatoore & Getson & Menvielle. et al., 1997; Drotar & Eckerle & Satola. et al., 1990）。インファンタイル・アノレキシアの子どもと母親の相互作用は、相互の葛藤や支配状況がより多く見られるという（Chatoore & Hirsch & Ganiban. et al., 1998；田中，1997）。以上のことから、田中（2003）は、青年期においても、食事に関する両親の行動や態度について、青年に根付いた内的なイメージが摂食障害と関連するのではないかと仮定し、食事場面での両親の行動尺度を作成した。そしてEating Attitudes Test26（Garner & Olmsted & Bohr et al., 1982；切池・永田，1992）との関連を重回帰分析によって検討した結果、母親の摂食の支配、料理の手抜き、父親の嫌悪感からEAT26への正のパスが有意であることが女子データで示された。また、男性データにおいても母親の手抜きと、父親の食事場面における積極的コミュニケーション、強制・注意、圧迫緊張から正のパスが有意であった。

他に、感情をコントロールする、あるいは感情を鎮めるために、対処手段として食行動に走るのが摂食障害の要因であるという考え方がある。Arnold & Kenardy & Agras（1992）は、過食に先立ち、怒りや、欲求不満の感情体験があるという人は被験者の42%、悲しみや抑うつ感が過食に先行する人は16%にとどまると述べている。また不安への対処反応として過食する群と、怒りや抑うつ感への対処反応として過食する群と比較すると、治療プログラムにおいて、後者の方において体重が増加し続けていたという（Arnold & Kenardy & Agras, 1995）。怒りについては、Milligan & Waller（2000）が、ノンクリニカル群の平均年齢21.3歳の女子青年を対象とした研究から、特性怒り（性格的な怒りの個人差）よりも、状態怒り（特定の場面での、怒りの感情）や怒りを抑制しようとする傾向が過食との相関を有することを報告している。

他にも、Fukunishi & Koayama（2001）が、摂食態度における「過食と食事支配」「食事制限」が「状態怒り」「怒りの抑制」「怒りの統制」と関連があることを報告しており、Milligan & Waller（2000）やFassino & Daga & Piero et al.（2001）の結果とも、ほぼ一致している。横山・小山（2004）は、摂食障害症状評価尺度（永田，1991）の総得点と、「状態怒り」「特性怒り」間に相関があることを示し、さらに肥満恐怖や過食との関連も報告している。怒りだけではなく、不安や抑うつ感と摂食障害との関連も議論されている（Button & Sonuga-Barke. et al., 1996；Godart & Flament. et al., 2000；中野，2006；永田・山田ら，2007）。だが、抑う

食事場面での母親の行動認識と、感情対処方略としての食行動が、摂食障害傾向に及ぼす影響

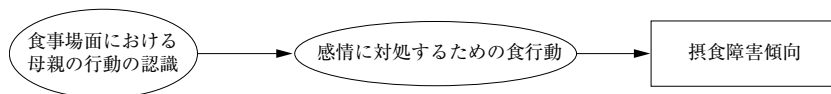


Figure1

つ傾向と身体発達タイミングと摂食障害傾向との関連は、ない、との見解もある（上長・齋藤，2009）。

摂食障害発症の要因は社会的・文化的要因，ジェンダーの問題など，複雑な要素が重複しているが，臨床実践場面では，境界性人格障害と摂食障害の合併が比較的高率で見られることから（Johnson & Tobin & Dennis, 1990），ネガティブ感情の起伏と摂食障害傾向との関連に焦点を当てることは，研究上意義があるだろう。なお，感情への対処反応としての摂食行動は，容易に食べ物に手が届く飽食的な環境によって形成されていることも考えられる。しかし，普段のその人の食生活のあり方も関与していることも推測される。例えば，イライラする感情体験の中で食べることが習慣化しているのであれば，同様の感情体験があった場合に，食べる行動へと駆り立てられる可能性がある。

そこで，本研究ではFigure1のように被調査者が18歳以前の食事場面での母親の行動の評価を出発点として，それがネガティブ感情に対処するための食行動に影響を与え，現在の摂食障害傾向を生じさせている，という時系列的な観点からのモデルを設定し，検討することを目的とする。ちなみに，以前，女子よりも男子データにおいて両親の食行動尺度と摂食障害傾向との関連が明確に示されていた（田中，2003）。そこで，母親の行動尺度を，実際の行動の評価ではなく，母親がかつてどのような行動や態度であったと思うか，という内的イメージを評価できるように項目の修正を試みる。合わせて今回は母子関係に焦点を当て，食事をする際の母親の物理的存在の評価，また母親の体型と自身の体型の比較，母親の体型への評価，青年自身の体重満足度が，食事場面での母親の認識，感情対処方略としての食行動，摂食障害傾向それぞれに，どのように影響を及ぼしているのかについて検討を行うことにする。

方 法

調査対象者

首都圏の私立大学，および公立大学2校の女子大学生367名に調査した。そのうち，記入漏れがあったものを除いて，329名を分析の対象とした（平均年齢19.75歳，SD = 1.18）。内訳は，大学1年生が80名，2年生が98名，3年生が133名，4年生が18名である。

調査期間

2004年7月～2005年10月に実施した。

調査手続き

いずれも、大学において無記名による質問紙調査を実施した。大学の講義中に研究調査であることを説明し一斉に配布、回答終了後にその場で回収した。

質問紙の構成

- ①フェースシート 被調査者の家族構成、被調査者が18歳以前の母親の就業状況、食事場面における母親の在・不在の評価、自身と母親の体型の比較と、母親の体型の評価、体重満足度、Body Mass Index(以下BMI;肥満度)算出のために、現体重と身長について問う項目からなる。
- ②食事場面における母親の行動認識の測定 食事場面での母親の行動尺度(田中, 2003)を、行動の評価ではなく、母親の行動や作った食事をどのように思っていたかという内容に改変したもの。項目選定にあたっては、前回の調査で因子負荷量が0.60以上であった項目を選択し、実際の摂食障害複数事例が心理療法の中で語った、家庭での食生活における被支配感、不適切な相互作用、母親への認識を参考にして項目を追加し、作成した。全21項目で5段階評定。
- ③摂食障害尺度 Eating Disorder Inventory (EDI) の邦訳版(永田・切池・松永ら, 1994)の下位尺度「やせ願望」「過食」「内部洞察」の計24項目。なお、「内部洞察」とは、自分が空腹かどうか解らない、自分の気持ちが解らない、といったような、自我同一性の混乱や、身体内部感覚の混乱を意味する尺度である。これらの尺度はいつも～まったくないまでの6段階評定であるが、Garner & Olmsted & Polivy (1983)の方法に従い、「いつも」を3点、「たいていは」を2点、「しばしば」を1点、ときどき～まったくないまでを0点として換算した。
- ④ネガティブ感情に対処するための食行動の測定 Emotional Eating Scale (EES;感情対処食行動)を日本語に訳した25項目を使用した。本尺度は、Arnold & Kenardy & Agras (1995)が、怒り、不安、抑うつ感と過食や摂食障害との関連を検討するために作成したものである。教示は「我々は、色々な感情に対して色々な方法で反応します。ある種の感情は、人々に食べることへと駆り立てることがあります。以下の感情を経験したら、あなたはどれくらい『食べたい』と感じるでしょうか、当てはまる数字に○をつけてください」と訳して提示した。先行研究に従い、1食べたいとは思わない～5食べずにはいられないまでの、5段階評定とした。

結 果

1. 調査対象者の傾向

回答者の食事を主に作っていたのは、母親が最も多く(77.7%)、次いで祖母(28.6%)であった。また、回答者が18歳以前の母親の就業形態は、フルタイム勤務が28.1%、パート勤務が28.6%、専業主婦が18.0%、自営業手伝いが7.0%であった。回答者の体重満足度(1満足～5不満足)は「不満足である」が最も多く36.0%、次いで「やや不満足である」が28.1%、「どちらとも言えない」が12.5%であった。回答者のBMIの平均値は21.30(SD=2.95)であった。

Table1 食事場面での母親の行動認識の因子パターン行列

項 目	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
〈因子1 要求察知 $\alpha = 0.82$ 〉				
私の体が丈夫なのは、母親の料理があるからこそだと思った。	0.72	- 0.02	0.06	0.55
色々な種類の食事を、母親は作って出してくれたと思う。	0.72	- 0.06	0.11	0.55
私が辛い時には、母親はおいしい食事を作ってくれたと思う。	0.60	0.07	- 0.01	0.36
母親は私の好きな食べ物と嫌いな食べ物を知ってくれていたと思う。	0.59	- 0.02	- 0.07	0.33
母親は嫌いなものを食べやすくなるように作ってくれたと思う。	0.58	0.03	- 0.03	0.31
私がどんな時間に帰ってきても、母親はご飯を温めてくれていたと思う。	0.57	0.03	- 0.08	0.31
母親は料理に手間をかけなかったように思う。	0.53	0.01	- 0.03	0.30
〈因子2 支配強制 $\alpha = 0.74$ 〉				
嫌いなものを食べるまで、母親に席を離れるのを許されなかったと思う。	0.02	0.91	- 0.14	0.57
私が食事を残すと、母親にしかられる気がした。	- 0.04	0.65	0.18	0.74
母親に、私が食べ終わるまで食事を止めたりその場から動くことを許されなかったと思う。	0.05	0.43	0.16	0.29
〈因子3 残余禁止 $\alpha = 0.80$ 〉				
母親が作ったものは、全て食べないといけな気がした。	- 0.02	0.07	0.79	0.62
「これ残したい」とは、母親に悪くてなかなか言えなな気がする。	- 0.02	0.00	0.78	0.66
他の因子の影響を無視した因子寄与	2.37	1.45	1.34	
因子間相関	F2	0.07		
	F3	0.17	0.56	

2. 食事場面での母親の行動認識の因子分析

母親の行動認識の21項目について、まず最尤法による因子分析を行い、固有値の減衰状況（第1因子3.43, 2.19, 0.94）から、2因子あるいは固有値1以下であるが3因子も妥当であると考えられた。適合性検定では3因子の適合性がよいことが示された（2因子 $\chi^2 = 165.42$, $df = 32$; 3因子 $\chi^2 = 76.82$, $df = 33$ ）。そこで、3因子を仮定して再度主因子法、プロマックス回転を施行し、因子解釈可能性と負荷量の低いものを削除し、最終的にTable1の結果となった（Table1）。第1因子、第2因子は、田中（2003）の要求察知因子と支配強制因子の構成項目と一致するため「要求察知」「支配強制」と命名し、第3因子は項目の意味内容を考慮し「残余禁止」と命名した。各因子の因子負荷量が0.40以上の項目を加算し、尺度得点とした。信頼性係数は、要求察知で $\alpha = 0.82$ 、支配強制で $\alpha = 0.74$ 、残余禁止で $\alpha = 0.80$ で、十分な内的整合性が示された。

Table2 Emotional Eating Scale (EES；感情対処食行動) の因子パターン行列

項目	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
〈因子1 抑うつ対処食行動 $\alpha = 0.92$ 〉				
不安な気持ちになると	0.84	- 0.04	- 0.03	0.70
悲しい気持ちになると	0.84	0.02	- 0.04	0.67
憂鬱な気持ちになると	0.78	0.01	- 0.01	0.61
心細い気持ちになると	0.76	0.07	- 0.05	0.59
孤独な寂しい気持ちになると	0.71	0.09	- 0.09	0.49
くよくよする気持ちになると	0.66	- 0.10	0.23	0.62
心配な気持ちになると	0.65	0.00	0.20	0.64
がっかりした気持ちになると	0.62	0.05	0.12	0.54
疲れ果てた気持ちになると	0.56	- 0.09	0.12	0.36
〈因子2 怒り・欲求不満対処食行動 $\alpha = 0.94$ 〉				
ムカつく気持ちになると	- 0.02	0.94	- 0.07	0.79
イライラする気持ちになると	0.20	0.92	- 0.29	0.76
怒り狂う気持ちになると	- 0.22	0.83	0.18	0.71
腹が立つ気持ちになると	- 0.08	0.83	0.04	0.65
トゲトゲしい気持ちになると	- 0.04	0.69	0.23	0.68
反発したい気持ちになると	- 0.04	0.69	0.21	0.65
欲求不満の気持ちになると	0.30	0.65	- 0.15	0.57
嫉妬や妬む気持ちになると	0.05	0.64	0.20	0.65
〈因子3 動揺・恐怖対処食行動 $\alpha = 0.90$ 〉				
狼狽する気持ちになると	- 0.10	0.06	0.92	0.79
ハラハラする気持ちになると	0.04	- 0.02	0.85	0.74
びくびくする気持ちになると	0.17	0.03	0.67	0.65
うんざりする気持ちになると	0.12	0.10	0.65	0.65
他の因子の影響を無視した因子寄与	4.90	4.93	2.86	
因子間相関	F2	0.55		
	F3	0.68	0.62	

3. EES（感情対処食行動）の因子分析

EESの日本語項目群について、先行研究において3因子構造であること（Arow & Kenardy & Agras, 1995）、固有値の減衰状況（11.79, 2.61, 1.35, 0.79）から、3因子で主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、3つの項目で因子負荷量が0.30以下だったため、これらを削除して再度因子分析を行い、Table2の結果を得た。第1因子は、先行研究の「Depression」尺度の構成項目とほぼ一致しているため「抑うつ対処食行動」と命名した。第3因子も先行研究における「Anger/Frustration」とほぼ一致していたため「怒り・欲求不満対処食行動」と命名した。第3因子は、先行研究は「Anxiety」であるが、先行研究での第3因子の構成項目は、本研究では第1因子で負荷量が高かった。そこで、今回、因子の解釈可能性から「動揺・恐怖対処食行動」と命名した。各因子の因子負荷量の高い項目を合計して、

食事場面での母親の行動認識と、感情対処方略としての食行動が、摂食障害傾向に及ぼす影響

Table3 各尺度の平均値・標準偏差と尺度間相関（BMI、体重不満足も含む）

	1	2	3	4	5	6
1 要求察知						
2 支配強制	0.06					
3 残余禁止	0.10	0.53 **				
4 抑うつ感	- 0.16 **	0.09	0.03			
5 怒り・欲求不満	- 0.07	0.17 **	0.14 *	0.56 **		
6 動揺・恐怖	- 0.20 **	0.11	0.03	0.67 **	0.64 **	
7 やせ願望	- 0.14 *	0.00	0.00	0.12 *	0.22 **	0.10
8 過食	- 0.26 **	0.11	0.09	0.42 **	0.38 **	0.38 **
9 内部洞察	- 0.26 **	0.12 *	0.08	0.17 **	0.24 **	0.18 **
10 BMI	- 0.13 *	- 0.09	0.02	0.01	- 0.06	- 0.05
11 体重満足度	- 0.10	- 0.04	- 0.04	0.11	0.15 *	0.09
平均	23.26	5.39	4.25	17.17	18.91	6.71
SD	6.12	2.53	2.24	8.02	8.46	3.49

	7	8	9	10	11
1 要求察知					
2 支配強制					
3 残余禁止					
4 抑うつ感					
5 怒り・欲求不満					
6 動揺・恐怖					
7 やせ願望					
8 過食	0.42 **				
9 内部洞察	0.43 **	0.61 **			
10 BMI	0.23 **	0.07	0.05		
11 体重満足度	0.47 **	0.27 **	0.09	0.46 **	
平均	5.93	2.62	4.92	21.30	3.92
SD	5.32	3.77	6.03	2.95	1.16

***p<.001 **p<.01 *p<.05

3つの尺度得点とした。信頼性係数は、「抑うつ」で $\alpha=0.92$, 「怒り・欲求不満」で $\alpha=0.94$, 「動揺・恐怖」は $\alpha=0.90$ であった。因子構成項目は異なるが, Waller & Osman (1998) が行ったEESの妥当性研究における3尺度の α 係数は, 0.80~0.87であるため, 本研究はそれよりも高い内的整合性が確認された。

4. 尺度間およびBMI（肥満度）、体重満足度との相関

Table3に、本研究で使用した母親の行動認識の3尺度、感情対処食行動（EES）の3尺度、EDIの3尺度の得点、BMIと体重満足度間の積率相関（Pearson）を算出した（Table3）。

Table4 食事場面での母親の存在における各尺度の平均値と分散分析結果

Tukey or Games Howell

尺度		1常に側にいた	2大体側にいた	3時々側にいなかった	4常に側にいなかった	F 値	多重比較
要求察知	N	87	150	48	12		
	M	25.91	23.11	20.42	17.67	13.88 ***	1 > 2 > 3 = 4
	SD	6.02	5.45	5.65	7.66	η 0.35	
支配強制	M	5.67	5.25	5.19	6.08	0.89	
	SD	2.80	2.24	2.57	3.68	η 0.10	
残余禁止	M	4.57	3.90	4.52	5.17	w 2.53	
	SD	2.34	1.98	2.56	2.79	η 0.17	
抑うつ感	M	17.63	16.55	16.48	25.00	w 1.88	
	SD	8.71	7.16	6.84	13.00	η 0.21	
怒り・欲求不満	M	18.23	18.95	18.33	25.92	3.05 *	1 = 2 = 3 < 4
	SD	8.36	8.28	8.23	10.39	η 0.17	
動揺・恐怖	M	6.55	6.45	6.96	10.25	w 1.87	
	SD	3.49	3.20	3.34	5.71	η 0.21	
やせ願望	M	5.25	5.91	7.25	5.25	1.53	
	SD	5.12	5.22	5.23	6.76	η 0.12	
過食	M	2.48	2.17	3.58	5.67	w 2.11	
	SD	3.35	3.22	4.45	7.38	η 0.21	
内部洞察	M	4.02	4.87	5.83	8.67	w 1.75	
	SD	5.15	6.10	6.04	9.45	η 0.16	

***p<.001 **p<.01 *p<.05 w (Welchの補正F値)

結果,「要求察知」は,「抑うつ」「動揺・恐怖」,「やせ願望」「過食」「内部洞察」との間に僅かな負の相関が認められ, BMIにもわずかな相関が認められた。「支配強制」は,「怒り・欲求不満」と「内部洞察」にわずかな正の相関が認められた。「残余禁止」は「怒り・欲求不満」のみにわずかな負の相関があった。

EESの「抑うつ」は, 肥満度や体重満足度との相関はなく, 「過食」との間に中程度の正の相関, 「やせ願望」「内部洞察」との間にわずかな相関が見られた。「怒り・欲求不満」は「やせ願望」「過食」「内部洞察」との間に小～中程度の相関があり, 体重満足度との間にもわずかな相関が見られた。「動揺・恐怖」は, 「やせ願望」と「過食」に相関があった。なお, BMI (肥満度) は, 「要求察知」と「やせ願望」との間にわずかな相関があったのみであった。体重満足度は「やせ願望」「過食」に小～中程度の相関があったが, 「内部洞察」との相関はなかった。

5. 摂食障害傾向と食事場面における母親の存在と体型評価, 被調査者自身の体型評価, 体重満足度

母親が食事時に側にいたかの4条件 (常に側にいた・大体側にいた・時々側にいなかった・

Table5 体重評価における各尺度の平均と分散分析結果

		Tukey or Games Howell						
尺度		1満足している	2やや満足	3どちらともいえない	4やや不満足	5不満足	F 値	多重比較
要求察知	N	14	28	45	91	120		
	M	23.07	23.96	24.96	23.33	22.42	1.55	
	SD	6.53	5.58	6.56	5.76	6.22	η 0.14	
支配強制	M	4.64	6.43	5.71	4.96	5.45	w 2.79*	N.S.
	SD	1.86	2.52	3.01	1.89	2.76	η 0.18	
残余禁止	M	3.79	4.61	4.8	4.02	4.18	1.27	
	SD	2.19	2.33	2.42	1.87	2.4	η 0.13	
抑うつ感	M	17.21	16.53	15.84	15.77	18.88	2.46*	4 < 5
	SD	10.53	7.62	7.53	7.10	8.42	η 0.18	
怒り・欲求不満	M	15.5	17.93	17.29	18.88	20.18	1.76	
	SD	8.5	7.47	8.62	8.38	8.57	η 0.15	
動揺・恐怖	M	6.86	6.14	6.16	6.53	7.17	w 1.10	
	SD	4.05	2.49	3.37	3.32	3.78	η 0.12	
やせ願望	M	1.14	3.18	2.73	5.14	8.92	w 32.58***	1, 2, 3, 4 < 5
	SD	2.03	3.19	3.70	4.49	5.46	η 0.50	1, 3 < 4
過食	M	1.21	1.79	1.38	1.70	4.15	w 7.65***	1, 2, 3, 4 < 5
	SD	1.93	2.30	2.25	2.66	4.76	η 0.34	
内部洞察	M	3.93	5.71	3.91	3.67	6.18	2.87*	4 < 5
	SD	5.70	6.61	5.67	5.43	6.31	η 0.19	

***p < .001 **p < .01 *p < .05 w (Welchの補正F値)

常に側にいなかった)を独立変数とし、各尺度得点を従属変数とする一要因分散分析を行った。等分散が仮定されない場合にはWelchの補正F値を算出し、効果量指標として η も算出した。また多重比較は、Tukey法を用いたが、等分散が仮定されない場合には、Games-Howell法を使用した。結果をTable4に示す。平均値の差が、「要求察知」、「怒り・欲求不満」において有意であった。「要求察知」では効果量 η も大きく、平均値の差も大きいといえる。「怒り・欲求不満」における η は0.17であり、効果量は小さいと判断された。多重比較の結果、「要求察知」は、常に側にいた群において最も尺度得点の平均値が高く、ついで、大体側にいた群、時々側にいなかった群の順で尺度の平均値が下降していた。反対に、「怒り・欲求不満」においては、常に側にいなかった群が他の3条件よりも尺度得点がありに高いことが示された。

次に、被調査者が18歳以前に自分よりも母親のスタイルがよいと思っていたかの4条件（かなりそう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・まったくそう思わない）について分散分析を行ったところ、平均値の差は有意ではなかった。被調査者が18歳以前の母親の体型評価の5条件（かなりやせている・やややせている・ふつうである・やや太っている・かなり太つ

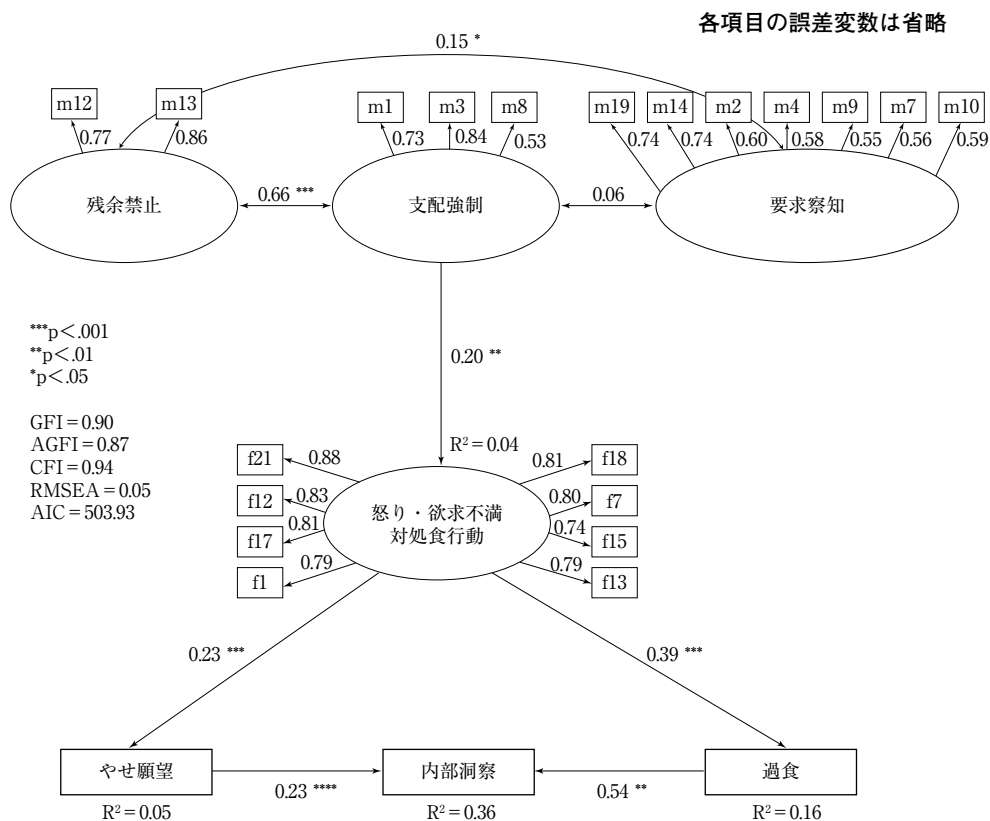


Figure2

ている)でも、分散分析の結果、尺度得点の平均値の差は有意ではなかった。

自身の体重満度については、満足している・やや満足・どちらともいえない・やや不満足・不満足の5条件での分散分析を行った (Table5)。結果、Table3で相関が有意であった「やせ願望」「過食」以外にも、「支配強制」「抑うつ感」「内部洞察」で、尺度得点の平均値の差が有意であった。多重比較では、「支配強制」における差は有意でなかったが、「抑うつ感」において、やや不満足群よりも不満足群の尺度得点の平均値が高いことが示された。だが η の値から効果量は小さいと判断された。「やせ願望」は、不満足群、やや不満足群の得点が、それ以外の群よりも高いことが示され、 η の数値から効果量も大きいと判断された。「過食」も同様に、不満足群が他の群よりも尺度得点の平均値が高いことが示され、効果量も中～大であった。「内部洞察」は、やや不満足群よりも、不満足群の尺度得点の平均が高かったが、効果量は小さかった。

6. 母子関係と感情に誘発された食行動から摂食障害傾向への仮説モデルの検討

先に示したような、仮説モデル (Figure1) を前提にして、「要求察知」「支配強制」「残余禁止」から、「抑うつ感対処食行動」(モデル1)、「怒り・欲求不満対処食行動」(モデル2)、「動揺恐

食事場面での母親の行動認識と、感情対処方略としての食行動が、摂食障害傾向に及ぼす影響

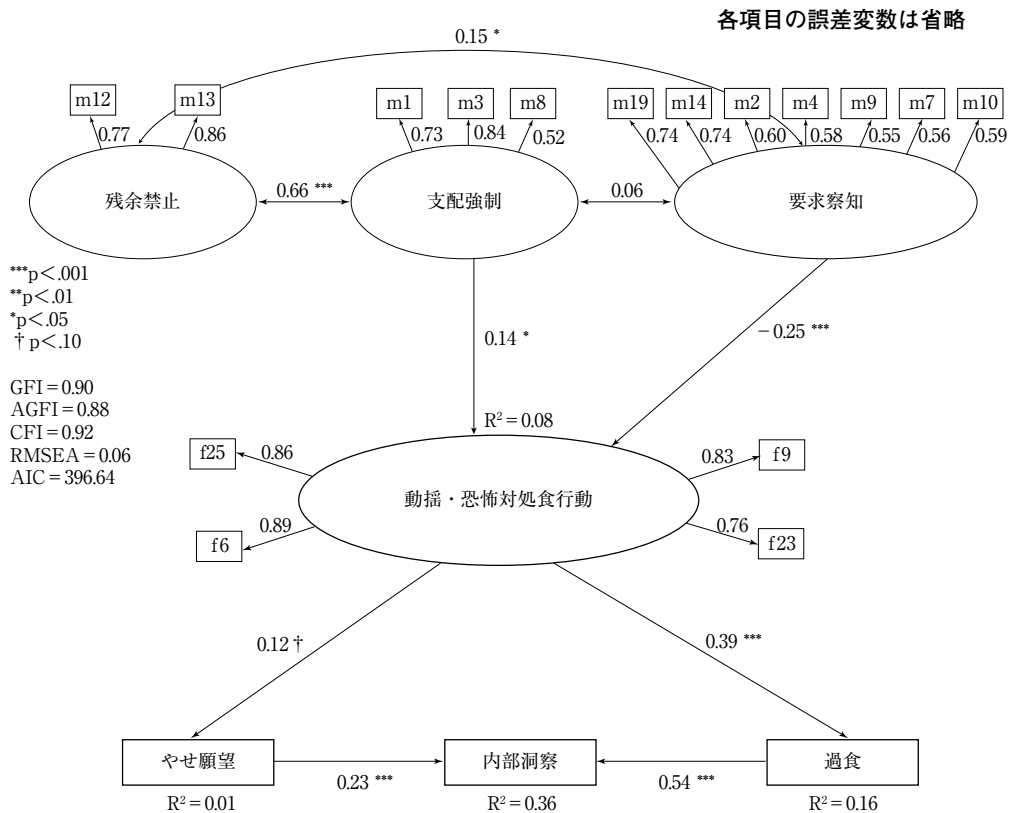


Figure3

怖対処食行動」(モデル3) いずれかを媒介し、EDIの「やせ願望」「内部洞察」「過食」に至る影響、そして、「やせ願望」「過食」から「内部洞察」に至る3つのモデルを設定し、共分散構造分析によって検討した。食事場面での母親の行動認識とEESの下位尺度は項目数が少ないため潜在変数とし、EDIの3つの下位尺度は、頻度を評定値としていること、得点換算しているため、観測変数とした。EDIの「内部洞察」には、EDIの「過食」「やせ願望」両方からのパスを設定している。最終的な従属変数を「内部洞察」にしたのは、永田・切池ら(1994)において、内部洞察の尺度得点が、クリニカル群であるアノレキシア(拒食)群、アノレキシア・ブリア(過食を伴う拒食)群、ブリア(過食)群間では差がなかったが、コントロール群(健常者)との差が有意であったからである。つまり、摂食障害傾向がクリニカルレベルかノンクリニカルレベルかどうかを判別する上で重要であると判断したためである。本研究では、Amos17.0を使用し、有意でないパスを削除しながら、GFI、AIC等の各適合性指標の改善の度合いをもとに最終的なモデルを導き、採用した。

「抑うつ感」を媒介したモデル1で採用したモデルは、母親の「要求察知」得点から「抑うつ感」へのパス(−.20, $p<.01$)、「抑うつ感」から「やせ願望」(.15, $p<.05$)、「抑うつ感」から「過食」へのパス(.44, $p<.001$)、「過食」から「内部洞察」へのパス(.58, $p<.001$)、「やせ願望」から「内

部洞察」へのパス (.22, $p < .001$) が有意だった。だが, $GFI = 0.88$, $AGFI = 0.86$, $CFI = 0.92$, $RMSEA = 0.06$, $AIC = 605.36$ で, GFI , $AGFI$ とも 0.90 以下であり, モデルとしては適格ではないと判断した。

「怒り・欲求不満」を媒介したモデル2は, Figure2のモデルを採用した。 $AGFI$ は0.90以下であるが, GFI , CFI とも 0.90 以上であり, $RMSEA$ が 0.05 で適合性はよいと判断された。「支配強制」から「怒り・欲求不満」へのパスが有意であった。だが $R^2 = 0.04$ で, 分散説明率は低かった。そして, 「怒り・欲求不満」から「過食」, 「やせ願望」へのパス, 「過食」, 「やせ願望」から「内部洞察」へのパスが有意であった。

モデル3は, Figure3のモデルを採用した。 GFI , CFI とも 0.90 を超え, AIC の値も他の採用モデルよりも小さく, 本データにおいて適合性が最もよいことが示された。母親の行動認識の「支配強制」「要求察知」から, 「動揺・恐怖」への正と負のパスが有意であり, 「動揺・恐怖」から「やせ願望」「過食」へのパスが有意, ないし有意傾向にあった。そして, 「やせ願望」, 「過食」から「内部洞察」へのパスも有意であった。しかし, モデル2と同様, 分散説明率は低かった。

考 察

1. 食事場面での母親の存在感と, 女子青年の体重満足度が及ぼす影響

本研究において, Table4に示すように, 食事場面における母親の物理的な存在感の評価による, EDIの下位尺度得点の差は認められなかった。だが, 母親の要求察知得点と, 怒り・欲求不満対処食行動得点において有意な差が得られた。本研究で18歳以前に, 食事時に母親が常に側にいなかったと評価している女子青年は, 母親が細やかに要求を察知してくれていないと感じていることが推測される。よって, 要求を察知してくれる内的な母親イメージは, 物理的な母親の存在によって影響を受けることを意味しているのだろう。近年, 共働き家庭が増える中, 児童や青年の家族不在の「孤食」が問題視されているが, このような状況が, 青年期以降に食事に対する肯定的なイメージを描くことを難しくさせる可能性を示唆している。

また, 物理的な母親の不在が, 怒りや欲求不満が生じたときに, 食行動に駆り立てさせる可能性が示唆された。幼少期から青年期にかけて, 実際の母子の相互作用が希薄である場合, 女子青年がイライラや欲求不満感情を, 食べることでコントロールしようとする行動傾向が生じる可能性が推測される。過食の典型例である気晴らし食い患者には, 母子関係の障害あるいは, 不適切な母親の養育態度が背景にあり, 精神療法面接時に語られる母親の内的イメージは, 批判的, 拒否的, あるいは脆弱であるという研究(野上, 1973)を支持していると考ええる。

体重満足度については, 本研究においても, 被調査者の「やせ願望」との関連の強さが示唆された。馬場・菅原(2000)は瘦身願望が瘦身のメリット感によって直接規定されると述べているが, 同研究で体型に関するデメリット感と瘦身願望とは中程度の相関があったように, 本研究では体重への不満足感が高い方が, 「やせ願望」の得点が上昇している。自身の体型や体重に不満足感を持てば, 女子青年はやせることを希望し, ダイエットしたいと考えるものではないだろうか。浦上・小島ら(2009)は男子青年において, 現体型のデメリット感が瘦身願望に

影響を及ぼしていることを報告しているが、女子青年でも同様であることが示されたと言える。

2. 食事場面での母親の行動とネガティブ感情により触発される摂食行動との関連

母子関係の問題と摂食障害との関連は、従来から臨床的な研究において指摘されてきた (Bruch, 1982; Palazzoli, 1978)。だが、調査研究から母子関係における特定のコミュニケーションについて検討したものは少ない。今回、幼児期以降の母子相互作用と食行動との関連が示唆されたのは意義があるだろう。相関分析、共分散構造分析の結果、18歳以前に、母親が女子青年自身の摂食についての要求を察知し、与えてくれる存在であったと認識している女子青年は、悲しみやうつ感情、孤独感、不安が生じたとき、あるいは、恐怖や動揺を覚えたときに食行動に駆られることは少ないことが推測された。母親によって提供される食事への安心感や信頼感が高い青年は、恐怖や不安、悲しみの体験から、心の安定を取り戻すために食を求めそうであるが、むしろ、逆の結果となった。これは、食事に関する母親への信頼感や感謝の念が、情緒的な支えを充分に得られている感覚や、自己信頼感を育てているために、食行動のみに偏った現実逃避的な対処方略を選択しないからなのかもしれない。

今回、18歳以前の食事場面において、支配強制的な母親であったという認識を持つ女子青年は、イライラやとげとげしい感情、欲求不満が生じると、食べたい衝動に駆り立てられる傾向が推測された。feeding scale で評価したインファンタイル・アノレキシアの母子相互作用は、健常群よりも、「相互葛藤」「支配状態への苦闘」の得点が高いという (Chatoore & Hirsch, et al., 1998)。対象関係論的には、むなしさや、抑うつ不安に苦悩し、持ちこたえられないために、食行動で不安を消そうとする、というのが、摂食障害の中核的な不安であると理解される (松木, 2006)。怒りや苛立ちも、食行動に駆り立てる要因となるのならば、心理臨床場面においては、うつ感情だけに焦点を当てるのではなく、うつ感情が形を変えて現れている、怒りや苛立ち、といった感情も丁寧に扱う必要もあるのではないかと考える。また、本研究の結果は、食事場面において母親から自由さを許されない、叱られるといった経験によって子どもである青年に苛立ちや怒りが生じたのか、その感情を子ども側が食事中にどのように経験したのか、その習慣性を含め検討する必要性を示しているように思われる。

3. 時系列的なモデルから

本研究では、ダイエット志向性に焦点を当てるのではなく、母子相互作用からネガティブ感情に対処するための食行動に焦点を当て、摂食障害傾向に至るプロセスを検討した。その結果、要求を察知してくれるという母親イメージが、動揺・恐怖感に対処する食行動を抑制すること、支配強制的な母親のイメージが動揺・恐怖に対処する食行動を促進することが示唆されたが影響力はさほど大きくはなかった。しかし、最終的に内部洞察への混乱に至ることが示唆された。支配強制的な母親イメージは、怒りや欲求不満の対処のための食行動を促進し、それが過食や過剰なダイエットにも影響を及ぼし、内部洞察の混乱をもたらす可能性が示された。しかし、分散説明率から、大きな影響力を及ぼしているとはいえモデルの適合度はよいが適

切なモデルとはいいがたい問題はある。動揺・恐怖感に対処する食行動は、過剰なダイエットや、やせ願望を促進する影響を及ぼし、その結果、内部洞察の混乱に至ることが推測された。しかし、怒り、欲求不満対処食行動も、動揺・恐怖対処食行動も、やせ願望への影響はわずかで、過食への影響力の方があることが示唆された。

もう一つ、本研究においてEESの3つの下位尺度から、過食、やせ願望への影響力は共通してみられるにも関わらず、内部洞察の混乱への直接のパス係数は有意でなかったことが興味深い。つまり、怒りや抑うつ感、動揺に対処しようとして食べる行動は、直接的には、満腹なのか解らなくなるといった内部洞察の混乱には影響しないということになる。Arnow & Kenardy & Agras (1995) は、EESの3つの下位尺度は、過食スケールと、1週間の過食の頻度と中程度の相関があったことを報告している。Waller & Osman (1998) は、EESの3尺度がすべて、EDIの「内部洞察の混乱」、および「過食」と相関があるが、「やせ願望」には相関がなかったと述べている。よって、本研究の共分数構造分析においては、EESとEDIの「過食」との相関は先行研究と同様の結果が得られたが、「内部洞察の混乱」との関連は先行研究とは異なる結果となっている。また、本研究のように、怒りや不満に対処するための食行動がやせ願望への影響が存在しているとすれば、拒食とEESとの関連について、さらなる検討の余地があるだろう。中野 (2006) は、EDI下位尺度と自己評価式抑うつ尺度 (SDS) で測定したうつ症状の関連から、うつ症状は、摂食障害傾向の心理的要因によって二次的に発生したものと述べている。だが、本研究のモデルの実用性の問題があるとしても、逆に、うつ感情や不安が存在するからこそ摂食行動に至るという道筋の妥当性も主張できると考えられた。Sugarman & Kurash (1982) は、食行動は、子どもの時の母親と共にした食生活に関連した感覚運動系の活動であるので、むちゃ食いは母子共生期の感覚運動的対象を呼び起こすことを意味するという。本研究の相関分析の結果、BMIはEDIのやせ願望に弱い相関 ($r = 0.23$) があったのみであった。肥満の状態にあるといった外見的要因よりも、個人の感情的側面母子相互作用といった心理的な要因の方が臨床レベルの摂食障害においては重要であることも考えられるだろう。また、今回時系列を意図し、母親の行動認識から過食、やせ願望への直接パスを仮定しなかったが、検討の余地があるだろう。

4. 今後の課題

本研究の限界は、時系列的なモデルといっても、縦断研究として経過を検討したものではないことにある。また、母親の行動認識尺度の「支配強制」「残余禁止」の構成項目数は少ない。潜在要因をよく表現している項目を新たに作成する必要がある。また今回、摂食障害傾向を測定するためにEDIの一部下位尺度を用いたが、ノンクリニカル群を対象にしているため、敏感に症状を反映しているわけではない。今後は臨床群を含めた調査を行い、感情体験や対象関係の質と摂食障害傾向との関連を検討する必要があるだろう。

引用文献

Arnow, B., Kenardy, J. & Agras, W. S. (1992) Binge-eating among the obese: A descriptive study.

- Journal of Behavioral Medicine, 15(2), 155-170.
- Arnow, B., Kenardy, J. & Agras, W. S. (1995) The Emotional Eating Scale: The development of a measure to assess coping with negative affect by eating. *International Journal of Eating Disorders*, 18, 79-90.
- 馬場安希・菅原健介 (2000) 女子青年における痩身願望についての研究. *教育心理学研究*, 48, 267-274.
- Bruch, H (1978) *The Golden Cage: The Enigma of Anorexia nervosa*. Massachusetts. Havard University Press. (岡部祥平・溝口純二 (1979) *思春期やせ症の謎—ゴールデンケージ—*. 東京. 星和書店)
- Bruch, H (1982) Anorexia nervosa: therapy and theory. *American Journal of Pshchiatry*, 139., 1531-1538.
- Button, E. J., Sonuga-Barke, E. J. S., Davies, J. & Thompson, M. (1996) A Prospective study of self-esteem in the prediction of eating problems in adolescent schoolgirls: Questionnaire findings. *British Journal of Clinical Psychology*, 35, 193-203.
- Chatoore, I., Getson, P., Menvielle, E., Brassraux, C., O-Donnell, B., Rivera, Y. & Mrazek, D (1997) A Feeding scale for research and clinical practice to assess mother-infant interaction in the first three years of life. *Infant Mental Health Journal*, 18, 76-91.
- Chatoore, I., Hirsch, R., Ganiban., J., Persinger, M. & Hamburger, E. (1998) Diagnosing infantile anorexia: the observation of mother-infant interations. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 37, 959-967.
- Drotar, D., Eckerle, D., Satola, J. & Wyatt, B (1990) Maternal interactional behavior with non-organic failure-to-thrive infants: a case comparison study. *Child Abuse & Neglect*, 14, 41-51.
- Fassino, S., Daga, G. A., Pierò, A., Leombruni, P. & Rovera, G. G. (2001) Anger and personality in eating disorders. *Journal of Psychosomatic research*, 51, 757-764.
- Fukunishi, I. & Koyama, K (2001) Relations of alexithymic characteristics with eating attitudes and hostility in female college students. *Psychological Report*, 88, 1245-1250.
- Garner, D. M., Olmsted, M. P., Bohr. & Garfinkel, P. E. (1982) The Eating Attitudes Test: Psychometric features and clinical correlates. *Psychological Medicine*, 12, 871-878.
- Garner, D. M., Olmsted, M. P, Polivy, J. (1983) Development and validation of a multidimensional eating disorder inventory for anorexia nervosa and bulimia. *International Journal of Eating Disorders*, 2, 15-34.
- Godart, N. T., Flament, M. F., Lecrubier, Y. & Jeammet, P. (2000) Anxiety disorders in anorexia nervosa and bulimia nervosa: comorbidity and chronology of appearance. *European Psychiatry*, 15, 38-45.
- 早野洋美 (2002) 男子大学生の摂食障害傾向に関する心理学的研究. *心理臨床学研究*, 20, 44-51.
- 生田憲正 (1995) 摂食障害の発症要因. *精神科治療学*, 10, 95-401.
- Johnson, C., Tobin, D. & Dennis, A. (1990) Differences in treatment outcome between borderline and nonborderline bulimics at one-year follow-up. *International Journal of eating Disorders*, 9, 617-628.
- 上長然・齋藤誠一 (2009) 中学生の形態的变化, 抑うつ傾向と摂食障害傾向の時間的関連性. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 3(1), 11-18.
- 切池信夫・永田利彦 (1992) 摂食障害の自己記入式調査票. *季刊精神科診断学*, 3, 457-464.

- 松木邦裕・鈴木智美編（2006）摂食障害の精神分析的アプローチ―病理の理解と心理療法の実際。東京，金剛出版。
- Milligan, R. J. & Waller, G. (2000) Anger and bulimic psychopathology among non-clinical women. *International Journal of Eating Disorders*, 28, 446-450.
- 永田利彦・切池信夫・中西重祐・松永寿人・川北幸男（1991）新しい摂食障害症状評価尺度 Symptom Rating Scale for Eating Disorders (SRSED) の開発とその適応. *精神科診断学*, 2, 247-258.
- 永田利彦・切池信夫・松永寿人・池谷俊哉・吉田充孝・山上榮（1994）摂食障害患者における Eating Disorder Inventory (EDI) の試み. *臨床精神医学*, 23, 897-903.
- 永田利彦・山田恒・村田進哉・河口剛・森下愛・切池信夫（2007）摂食障害における社会不安傷害. *精神医学*, 49(2), 129-135.
- 中野敬子（2006）女子大学生における摂食障害傾向と心理的要因の関係. *学生相談研究*, 27, 149-160.
- 野上芳美（1973）青春期における気晴らし食い（Binge Eating）の精神病理. *日大医学雑誌*, 32, 218-228.
- Rosen, J.C., Tacy, B. & Howell, D (1990) Life stress, psychological symptoms and weight reducing behavior in adolescent girls: A prospective analysis. *International Journal of Eating Disorders*, 9, 17-26.
- Selvini-Palazzoli, M (1978) Self-Starvation: from individual to family therapy in the treatment of anorexia nervosa. Aronson, New York.
- Sugarman, A., & Kurash, C. (1982) The body as a transitional object in bulimia. *International Journal of Eating Disorders*, 1, 57-67.
- 田中志帆（2000）神経性無食欲症事例における感情表出の意義. *心理臨床学研究*, 18, 333-344.
- 田中志帆（2003）食事場面での両親の行動が，思春期青年期の摂食障害傾向を規定する可能性. *群馬県立女子大学紀要第24号*, 255-273.
- 田中千穂子（1997）乳幼児心理臨床の世界―心の援助専門家のために。東京，山王出版。
- 浦上涼子・小島弥生・沢宮容子・坂野雄二（2009）男子青年における痩身願望についての研究. *教育心理学研究*, 57, 263-267.
- 横山知行・小山智子（2004）女子大学生における摂食障害傾向と怒りおよび完全主義との関連. *新潟大学教育人間科学部紀要*, 7(2), 165-174.
- Waller, G., & Osman, S. (1998) Emotional eating and psychopathology among non-eating disordered women. *International Journal of Eating Disorders*, 23, 419-424.
- Whitehouse, A, M & Freeman, C, L., & Annandale, A. (1988) Body size estimation in anorexia nervosa. *British Journal of Psychiatry*, 153(2), 23-26.

Summary

The Influences of Mother-Child Mealtime Interaction during Childhood, and Emotional Eating on Eating Problems among under Graduate Women

TANAKA Shiho

This purpose of the present study was to examine the influence of mother-child mealtime interaction during childhood and emotional eating on eating disorder symptoms in female undergraduate students (N=329). Three subscales of EDI (bulimia, drive for thinness, interoceptive awareness) Emotional Eating Scale (EES) and Mother-Child Interaction in Mealtimes scale (MCIM) were used as measures in this study. It was hypothesized that mother-child interaction during mealtimes up to 18 had an influence on emotional eating. It was also suggested that this in turn, influences emotional eating and eating disorder symptoms. These hypothetical models were investigated by structural covariance analysis. In addition, the relation between the frequency of the presence of the mother at mealtimes, dissatisfaction with self-weight, MCIM, EES were investigated. The result were as follows: (1) Subjects indicating the absence of the mother at mealtimes scored much higher than other students on the EES subscale (eating to reduce anger/frustration). Subjects with high dissatisfaction about their weight scored higher on the depression subscale in EES as well as in the subscale drive for thinness, bulimia, and interoceptive awareness. (2) Mother-child controlling interaction had a facilitative effect on bulimia and drive for thinness, through eating to reduce anger/frustration, and sensitivity to requests in the mother-child interaction had an inhibiting effect on bulimia and eating to reduce fear/disturbance.

Key words: eating attitudes; emotional eating; negative affect; Mother-Child mealtime interaction

青山學院女子短期大學

紀 要

第六十四輯

平成22年12月 刊

JOURNAL
OF
AOYAMA GAKUIN
WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

NO. 64

DECEMBER, 2010

目次

脳死・臓器移植をめぐる公共的議論と法の役割

.....河見 誠.....1

詞的情景論・(1)——「海辺の別れ」という詞場——

ミュージシャンを読むためのストラテジとしての詞作品研究の課題

.....おかざきかずお.....1

個人語彙規模の測定に関する一考察

.....高野 嘉 明.....9

EFL Wordlists: The Need for a Modern Learner Lexicon

.....Joseph Phillips.....27

女子短期大学生の環境意識

.....梅澤香代子、宮川香織、廣田道夫.....37

日清戦争開戦前夜の思想状況

——金玉均暗殺事件をめぐる一考察——

.....小林瑞乃.....45

バイオ燃料に関するアメリカの動向について

.....信澤久美子.....65

英国産業連盟と1920年代不況

——デフレーションと構造調整——

.....秋富創.....77

身体毀損の噂に見る社会の表象

.....渡辺良智.....93

先行経験が意思決定における後悔に及ぼす影響

.....武田美亜.....111

現代ロシア社会における子どもの養育をめぐる諸問題

..... 村 知 稔 123

習得の時短のための救急蘇生法トレーニング・プログラムの構造解析

..... 渡 部 かなえ 141

ピースメイキングとキリスト教

..... シェロ マイク 151

フォーマル・スキーマとしての5文型と英文理解

..... 黒 岩 裕 159

食事場面での母親の行動認識と、感情対処方略としての食行動が、

摂食障害傾向に及ぼす影響

..... 田 中 志 帆 169

青山学院女子短期大学研究成果一覧 187

CONTENTS

OKAZAKI Kazuo	
On the Poetical Background of Popular Song	1
 TAKANO Yoshiaki	
A Note on the Measurement of Personal Vocabulary Size	9
 Joseph Phillips	
EFL Wordlists: The Need for a Modern Learner Lexicon	27
 UMEZAWA Kayoko, MIYAGAWA Kaori, HIROTA Michio	
Study of Ecological Awareness of Women's Junior College Students	37
 KOBAYASHI Mizuno	
The Logic Behind a Justification of the Sino-Japanese War	
—An analysis of Japanese newspaper claims over the assassination of the Korean	
reform politician Kim Okgyun—	45
 NOBUSAWA Kumiko	
Biofuel Problems in the U.S.	65
 AKITOMI Hajime	
The Federation of British Industries and the Depression in the 1920s:	
—Deflation and Structural Adjustment—	77
 WATANABE Yoshitomo	
Images of Society Seen through Body-parts Rumors	93
 TAKEDA Mia	
The Effects of Prior Experience on Regret in Decision-Making	111

MURACHI Toshimi	
The Problems Surrounding the Upbringing of Infants and Children in Contemporary Russia	123
 WATANABE Kanae	
An Efficient Program for Basic Life Support Training Designed to Shorten the Time for Mastery	141
 Mike Sherrill	
Peacemaking and Christianity	151
 KUROIWA Yutaka	
Reading Comprehension and Five Sentence Patterns as a Formal Schema	159
 TANAKA Shiho	
The Influences of Mother-Child Mealtime Interaction during Childhood, and Emotional Eating on Eating Problems among under Graduate Women	169
 ~~~~~	
KAWAMI Makoto	
Public Discourse on Brain Death and Organ Transplantation: the Role of Law .....	1

編集委員

宮田雅智 中井章子

藤本勝義 大野芳材

池田孝一 浅見均

石井孝彦

執筆者（五十音順）

秋富 創 准教授

岡崎和夫 教授

河見 誠 教授

黒岩 裕 准教授

小林瑞乃 専任講師

シエロマイク 准教授

高野嘉明 教授

武田美亜 専任講師

田中志帆 准教授

信澤久美子 准教授

※廣田道夫 教授

Phillips, Joseph 准教授

村知稔三 教授

渡部かなえ 教授

渡辺良智 教授

※梅澤香代子（本学非常勤講師）

※宮川香織（本学家政学科副手）

※印は共同執筆者

平成二十二年十二月十日発行

青山学院女子  
短期大学紀要 第六十四輯

編集  
発行

青山学院女子短期大学  
東京都渋谷区渋谷四ノ四ノ二五

印刷 丸善株式会社